

3 器物集積遺構の性格

はじめに

本報告において器物集積遺構と称したものは、祭祀遺構としてとらえられるものである。しかし、小林行雄の「厳密な意味では、かつてそこで祭りの儀式がおこなわれたことを立証しうる遺跡をさすべきであるが、発見された遺物が祭祀に用いられるものであれば、これを祭祀の遺跡と、便宜上いうことができる。また、特殊な遺物の発見がない場合にも、遺跡が特殊な施設をもって、住居や墓などの目的に用いられたものでないことがあきらかであるばあいには、これを祭祀遺跡と推定することもある。」という祭祀遺跡についての定義を引くならば、石製模造品の出土をもって「便宜上」、あるいは特殊な施設であるから「推定することもある」祭祀遺構でしかない。下芝天神遺跡の集積遺構調査の成果として、これを「厳密な意味」の祭祀遺跡として位置づけるために、「祭りの儀式」として行われた人々の行動の立証に幾ばくかは近づきたいというのが本稿の願いである。

(1) 器物集積遺構の構造

図245は、集積遺構出土土器のうち、旧地表面に接している土器及びもっとも低いレベルが記録された土器を抽出したものである。泥流や洪水による攪乱が及ばない、あるいはごく少ないと考えられる土器群であり、集積行動に際しては最初に置かれた土器に近いものと考えられる。1～3群において特に顕著であるが、周辺部に比較的大型の壺・甕が認められ、中央部に坏、高坏、埴など、中・小型の土器が、密集して積み重ねられるという傾向が看取される。2群においては、壺・甕が直線的に配列された状況が看取される。こうしたことから、これらの土器は無秩序に置かれたわけではなく、集積行動に先立って、壺・甕などが意図的に、「構造」を持って配置されたものと考えざるを得ない。集積群は、これらの壺・甕の配列で示される構造を下敷きにして成り立っていることになる。

1群では西南部分に、比較的大型の壺・甕類がまとまって認められた。南東隅に222・209があり、これから北西方向に228・224が並ぶ。西南辺を形成するものと考えられる。208・210は転倒しているが、本来はこの列を構成するものであった可能性がある。これと対応する北東辺に当たる位置には、実測個体にはなかったが比較的大型の甕のものと思われる土器破片を南東端として、225・207があり、この両辺を繋ぐ、222-208-207-(甕)によって、区画が形成されることになる。壺、埴、甕がこれに沿って置かれ、鉢の中でも、甕に近い作りのものは外周部に置かれる。集積された土器の主体を占める坏には特定の分布傾向が認められないが、ほとんどが区画の内部に集中し、区画外では散在的な状態でしか認められない。埴・高坏も同様の傾向であり、この点からも1群が独立した構造を有するものと見ることができる。

2群の発掘調査時には、二つの事象が注意された。一つは、北西部近くに配された1588の須恵器大甕の存在である。須恵器自体、集積遺構中には5点しか認められない希少な存在であり、特に1588は、大型の甕で、かつ胴下半を欠いた形で旧地表面に据え置かれていた。接合残となった破片中にも須恵器片は認められないため、ここに運ばれた段階で既に下半部がない状態であった。これが集積の中心的な位置を占めるものと考えられたのである。この周囲には、1444・1456・1357・1386など、大型の壺・甕類が据えられ、この周りの中・小型の土器類が集積されたものとみられた。いま一つは、南西辺での壺・甕類の顕著な列状構造である。図85のエレベーションD・Eラインに見られるように、1466-1444-1447-1353-1358-1461と比較的大型の甕が並び、この内側に、やや斜行して、1475-1371-1477-1483-1584-1519-1448-1376など、中型の甕列が並ぶ。外



図243 最下位のレベルにある土器

郭の1446-1461のラインは、転倒しているが1439などにつながるものと思われ、ここから北東へ折れて1349へとつながる可能性がある。1439から1349までの間には大型の土器が見られないが、泥流の営力を考えれば、集積上位に載った状態で検出された1354などが本来はこの位置にあったものとも考えることもできる。内郭の中型土器列のラインは1589の須恵器甕を経て、1519に至り、ここでやはり北東へ折れて1357-1588-1362へと続くものと考えられる。このラインは1361・2407につながる。1446からは、北東方向に1459-1368-1499のラインも認められる。

5群は、北西部に壺・甕が多く認められ、南東側に坏・高坏などが集積される状態で、2群北部との共通した構造を示しているため、2群・5群を一体のものとして捉えられよう。

3群については、調査時に位置記録ができなかったものが多く、出土位置図中に示したものは195個体分と、出土個体数の30%に満たない。十分な情報を得ていないが、構造を支持するものとして着目される大型の壺・甕については、大まかながら出土位置が記録されており、記録を欠くものは2177・2149の2点のみであるので、構造の把握には支障を来さないものと考えられる。この群でも、南東―北西方向の列状に壺・甕類が集中する。2152・2145・2151・2186・2180などが、2群の南西辺とほぼ平行するように認められる。また、2148・2146・2406、2176・2183・2144も、2152-2180列とやや方向を違えるが、列状構造をなしている。これら壺・甕列の北東に坏・高坏などの小型品が集積されている。この群の構造については、情報の限定性も相まって確定しがたい。

4群は他群に比してごく散在的であり、群としての独立した構造を示すような配列は認められない。北部に2042-2296の坏類が列状に並び、1群北西辺の延長上に当たるかに見えるが、確定できない。

点繋ぎのような作業となったが、以上により器物集積遺構が、壺・甕の配列による3つの構造の集合を基本とすることが想定された。1群の222-208-207-(甕)を各頂点とする方形構造(以下A構造)、2・3・5群の1446-1439-2147-2152を各頂点とする方形構造(以下B構造)については全体の形状を窺うことができる。今一つは3群の2148-2150を南西辺としたであろう構造(以下C構造)であるが部分的な調査にとどまる。

この方形構造は一辺を開口したコの字状の形態であっただろう。ロ字型の、閉塞された区画の中に土器を集積するに当たっては、配列された壺や甕をまたぎ越して内部に入らなければならないことになる。少なくとも集積行動が行われた時点では、開口部を想定したほうが自然である。積み上げられた土器が、A構造においてもB構造においても南西部に中心を持つ山を成していること、また、集積に当たって、以前に置かれたであろう土器を踏みつぶしたような形跡が見られないことなどは、その開口部が北方向にあったことを思わせる。C構造でもこれはおそらく同じであって、調査限界においては土器の出土が途絶えており、A・B両構造と類似の方形構造を有するものとすれば南西側に土器の山があったことになる。A構造においては222・209・221と(甕)の間に、わずかながら土器分布の希薄な部分がある。B構造においても1499から2152・2145までの間は空白域となる。B構造ではここが機械掘削を受けた部分に当たるが、B構造全体からすればさほど多量の土器が失われたわけではない。開口部の候補地としてはここが一番妥当と思われる。

(2) 器物集積遺構の形成過程

集積遺構の形成過程には、二つの観点がある。一つは前項で想定した3つの構造が、どのような順序で形成されたのかを跡づけることであり、一つはそれぞれの構造を基本として、土器類の集積行動がどのようになされていったかを復元することである。

前者を考える際に基本となる、各集積群出土土器の編年の位置については次説で述べられるが、3構造共にかなり近接した時期の所産であり、埋没時期はほとんど文字通りに同時である。顕著な時期差はないもの

の、1群→2群→3群の順で新旧の位置が与えられるものと思われる。1群すなわちA構造がやや古い様相を呈する点は土器の編年の位置以外のいくつかの面からも看取される。B構造（2・5群）やC構造（3群）で器表面あるいは内面の磨耗が激しい坏が15%程度であるのに対し、A構造では20%を越えることや、数量化できない観察時の印象にとどまるが、A構造に集積された土器が、他の構造に比して乱れかたがやや大きいことがそれである。器面の磨耗や土器の乱れが、集積行動の完了から埋没までの時間経過を反映したという仮定に立てば、これらもA構造の古さを示す傍証となろう。

後者については、前項までの記載からいくつかの過程が復元されるだろう。どこか他の場所から、集積遺構の位置に土器を移動する行動が集積行動である。従って、2つの場所での行動が考えられなくてはならない。重なり合う土器の中に石製模造品・白玉を入れる行動は、集積遺構以外の場所で、集積行動に先立って行われたものと見ることができる。集積すべき土器を重ね、移動の単位を形成することも、ここにおいて行われた行動であろう。壺・甕類の列として看取される方形の区画を作ることは、集積行動に先立つ段階に想定される。旧地表面に圧痕を残すような土器は、ほぼ確実にこの行動によって置かれたものと見ることができよう。こうした前段階をなす行動に次いで、具体的な集積行動が行われた。区画の奥、すなわち南西辺沿いや北西辺沿いの南部から土器が置かれていった。繰り返しになるが、こうして置かれた最初の土器を、次の土器を置く際に踏みつづすことはないため、下位の土器を平面的に並べ、次いでその上に次の段の土器を積み上げる、というような行動は想定できない。従って、土器を奥から手前へ、南西から北東方向に向かって順次集積していくことが主体的な行動方向であり、その結果として土器の山ができあがるという状況が想定される。また土器は、放り投げられたり、割られたりすることなく置かれている。甕の中に入った坏を見ても、正位で並ぶように出土するものがあり、放り込まれたものとは考えられない。重なった状態で出土した土器が多いこともこれを示すものである。

この後に、何らかの行動がこの場所においてなされた痕跡は認められない。3つの構造が、順次形成されていったとすれば、先行して作られた構造には保守も含めて手を加えることなく次の構造が作られている。集積行動の完了が、この場に関わるすべての行動の終了と考えて良いだろう。

（3）下芝パターンの集積遺構

5～6世紀代を中心とする時期の所産で、集落内及び集落の周辺と考えられる地点にあり、土器を中心とする器物が集積されるという意味で下芝天神遺跡の器物集積遺構と類似した遺構については、例は多くないものの以前から認められている。遺構の類型化や構造の復元へ向けての考察も始められ、遺構そのもののなかから祭祀の実相をくみ取ろうとする新しい視点が生まれている。集積遺構を、単に遺物の集合としてではなく、本来的な意味での遺構として捉え直すことが求められている。本稿も、こうした視点に基づいて、この遺構が壺・甕によって区画される3つの構造からなることを示し、さらにこの遺構の形成過程をたどろうとした。下芝天神遺跡の集積遺構形成にかかる一連の行動を整理すると

- ① 土器設置によって構造を形成する
- ② 構造外の場所で土器内へ白玉を入れる・土器を重ねる
- ③ 構造外の場所から構造内へ完形土器を集積しこれにより行動が完了する

となる。このような行動の結果形成された集積遺構について、下芝パターンの集積遺構と仮称しておこう。

下芝パターンの集積遺構は、下芝天神遺跡にのみ孤立的に存在するものではない。大型の集積遺構の中で、壺・甕類など集積された土器自体またはその一部が何らかの配列を持っている、意図的に配置されていると考えられる例が特に近年の調査例で目立ち、構造や行動の復元が可能なデータ採取も意図的になされている。

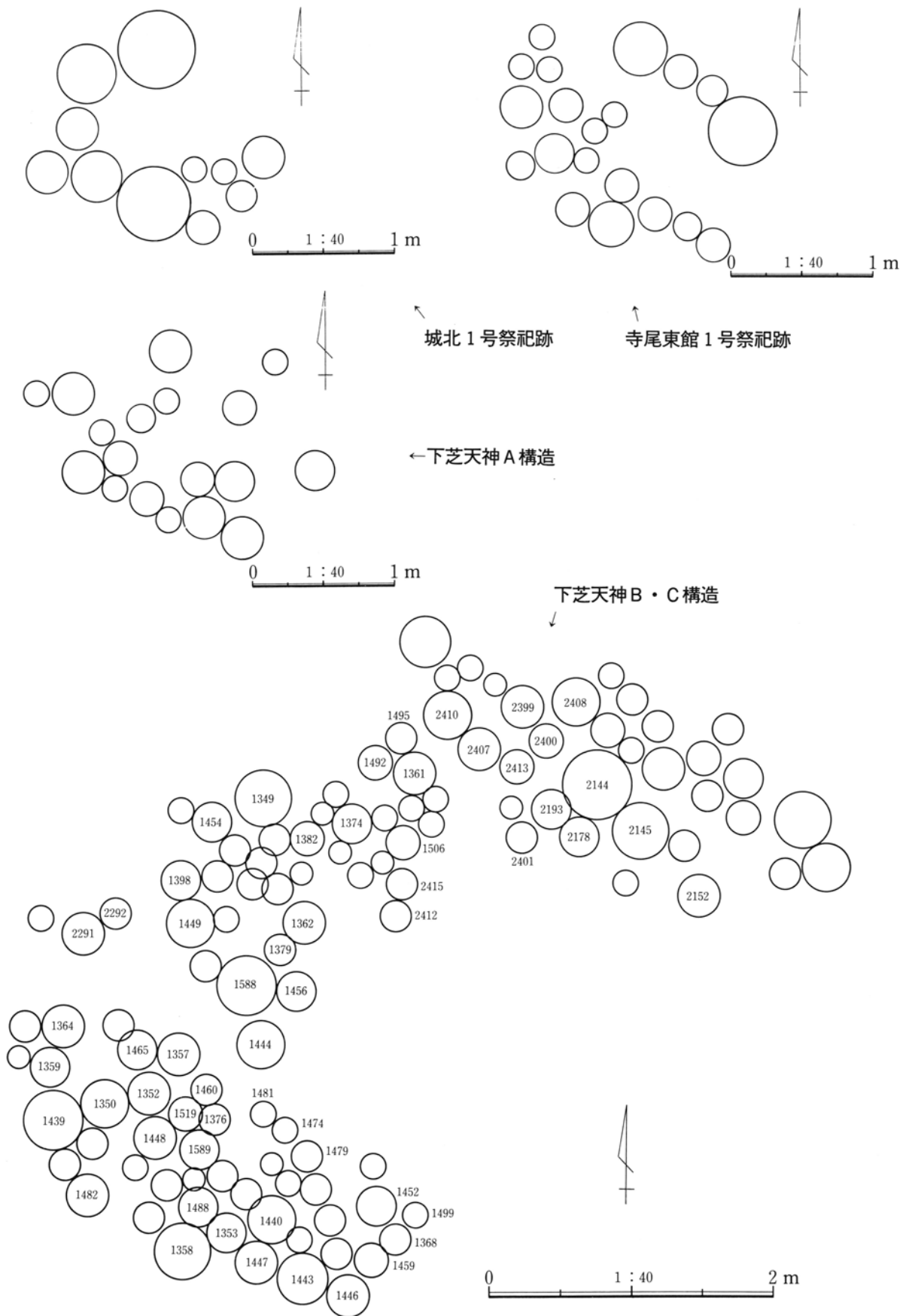


図244 集積遺構の構造

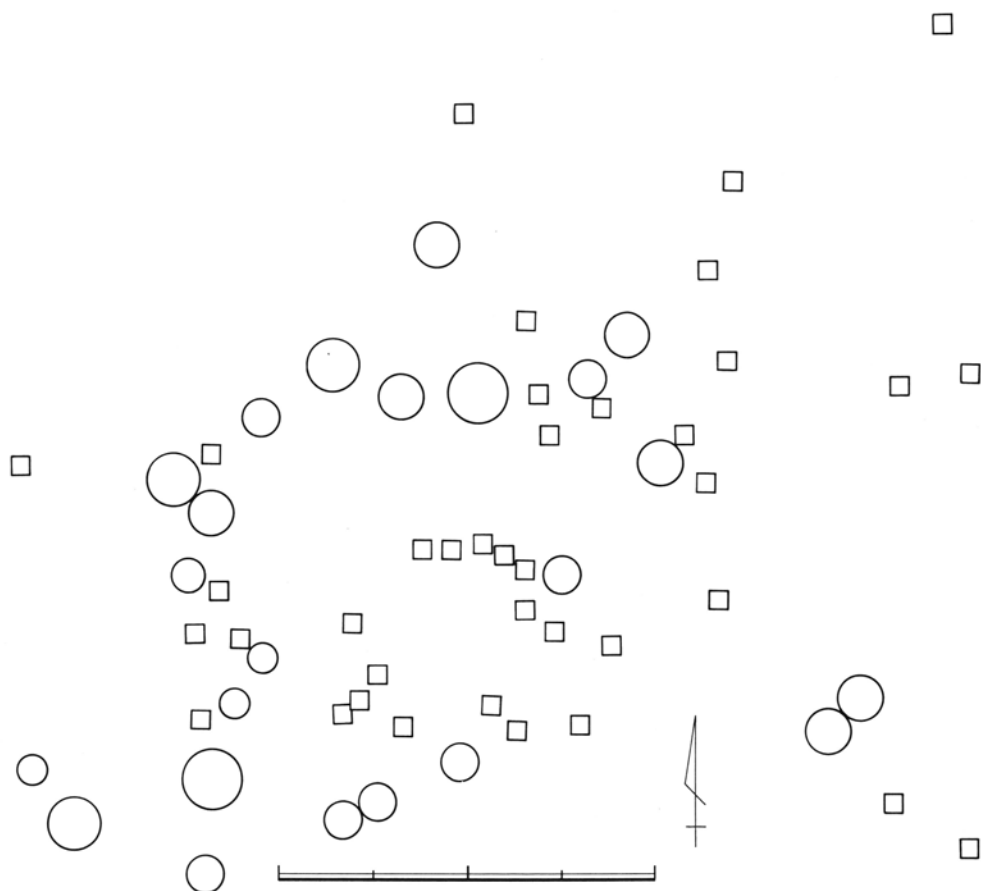


図245 松本市高宮遺跡

下芝天神遺跡とほぼ同時期に調査が行われた高崎市寺尾東館遺跡1号祭祀跡、埼玉県深谷市城北遺跡1号祭祀跡、長野県松本市高宮遺跡1号土器集中区は下芝パターンの遺構として把握できるものである。

城北遺跡1号例では大型壺がコ字状に配置されるのを基本形とし、中型の壺・甕が外郭を形成し、内部に坏などの小型の土器が集積されるという基本構造が想定されている。寺尾東館1号例でも壺・甕類について、「……比較的大型のものについては、遺構の外側に多く、遺物どうしを結んでいくと規則的なラインが形成される。ランダムな配置ではなく、基本的な設置位置を決定していたと思われる。」とされている。下芝天神遺跡A構造・城北遺跡1号・寺尾東館1号を、壺・甕の配列をもとに対比すると、広がり大きさ、広がり方ともに非常に類似していることがわかる。また、土器の個体数も250～300個体内外と比較的近い。高宮1号例では報文から個体別の出土位置を読みとることはできず、また文中で「特定の機種が一ヶ所に集められたような跡はない」とされている。桜井1996はこの例について「祭祀遺物の廃棄場所」としているが、付図から壺・甕の位置を拾い出すと外周部に比較的多くみられ、区画線を描くかと思われる直線的配列も認められる。大型の壺・甕には「正位で胴部中程まで埋められた様な」ものもあるとされており、これらが基本的な構造を形成する存在であるものと思われる。高坏脚部が正立状態で出土している点、またこれを押さえるかのように小型丸底壺や埴が配されている点などからも、無秩序に廃棄されたものとは思えない。情報が不足するため構造を確定するまでには至らないが、下芝天神A・B両構造の中間的な規模を持つ基本構造、あるいはA構造に近い形態・規模の構造が（B・C構造が隣り合って作られるように）いくつか複合している

可能性が考えられる。

こうしてみると、下芝天神A、城北1号、寺尾東館1号、高宮1号の4例は、大型の土器による方形区画の1辺またはその一部を開放するという共通した基本構造と、ほぼ相同の規模を有するものと理解される。下芝天神B構造も規模の点では大きく異なるものの、方形区画の一部を開放するという基本構造は共通する。

大型の壺・甕という基本的な構造を支持する土器を安定させるような造作が認められる点も共通している。下芝天神B構造では、これらの土器を取り上げた跡にくっきりと深く残された窪みが印象的である。ピットといえるほど明確なものではないが旧地表面を窪めることによって土器の安定がはかられた可能性が高い。また、一部で認められる土を盛り上げて基礎を作るような状況は、壺・甕の口縁部高をそろえようとする意識の産物であるかも知れない。

寺尾東館1号でも同様の窪みがあり、これについて「土器の周囲を土盛りしていった可能性が高い。」「人為的な工作物の様相を色濃く残している。」とされている。高宮1号では「甕・壺など大型のものは・・胴部中程まで埋められたようなものも目につく。」とされる。城北1号ではこうした窪みは見られないようであるが、「壺や甕の安定を保つために底部に当てられた坏群」がある。こうした例は例示した以外にも見られる。群馬郡群馬町上井出遺跡（清水豊1992）はごく部分的な調査例であるが、少なくとも下芝天神遺跡A構造と同程度の規模となると考えられる集積遺構で、ここでも「大型の甕が地面をやや窪めた状態で正立に据えられ」ている。意識的に構造が形成されたことの証左であろう。

平岩1996はこうした壺・甕類の固定行動について「土器集積をそのまま維持するためのもの」との解釈を示しているがこれは採らない。基本構造を維持することに目的があるものと考え。構造の形成とその中に土器を集積する行為の間には時間差があったと考えられる節があるからである。寺尾東館1号では胴上半が割れた甕の上部に、5 cmほどの間層を挟んで重ねられた坏が載っている。報告者は「祭祀行為が2回以上行われていた」との捉え方を示すが、これらの甕は基本構造にかかる大型土器であり、構造内に集積される土器と同列に扱うべきではなかろう。下芝天神遺跡において、土器中に「土が入る」「黒色土が入る」との調査時のメモが付された土器がある。1群調査時には明確に意識されておらずこれについての記録がないが、2群では比較的これについての記録が多い。これら土の入った土器の垂直分布を見ると、比較的下位に一つのまとまりがあり、上位にもう一つのまとまりがあることがわかる（図248）。上位のまとまりについては、集積行動の終了から泥流に埋没するまでの間に堆積した土が入っているものと見られよう。下位のまとまりについては旧地表面に近いがために土が入りやすい状態があったであろうことも想定されるが、基本構造が造られるに際して置かれた土器の中に黒色土が堆積したのではないかと考えられる。

高宮1号では高坏脚部が小型丸底土器や埴に押さえられるようにして、正立状態で出土している。重ねられた土器の集積とは異なり、意図的に据え置かれたものと考えられる。こうした土器も構造の一部をなしていたであろう。壺甕類による区画線とこうした土器群の配置を持った構造が、集積行動に先立って形成され、一定時間保持されることが期待されていたものとみられる。寺尾東館1号では、須恵

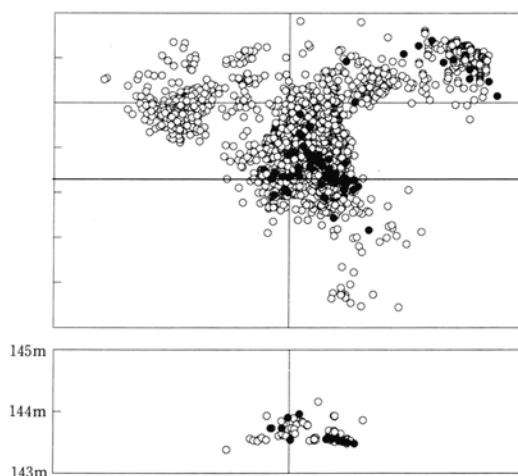


図246 土の入った土器

器が破片化し、「すべて破碎された状態」とされるが、これ以外は「長年の間の土圧やその後の耕作などにより、破壊されたものと思われる。」とされていて、意図的な破壊行動は想定されない。高宮1号についてはやや不確実さが残るが、高坏脚部のあり方などからは意図的な破壊は考えがたい。城北1号では上位の土器は破片化しているがこれは遺構を覆う堆積層形成後のもので、「この祭祀跡は……集落の終焉を迎えるまでほとんど手を加えられずに放置されて埋没し」ている。破壊を意図せずに集積され、集積の終了がこの場にかかる行動の完了と見られる点での共通性を見ることができる。

一方、寺尾東館の須恵器のように破片化した土器が集中して検出される事例は比較的多く報告され、(何らかの行動)→完形を意識しない集積、あるいは(何らかの行動)→土器の破壊→破片の収集→収集された破片の集積という、明らかに下芝パターンとは異なる行動の結果となろう。集成事例から見るとこちらのほうが普遍的であったもののようにも思われるが、後世の攪乱によって破片化したものと、破片の集積として形成されたものとの区分が明らかでない場合もあり、これについてはさらに検討が必要だろう。

(4) 下芝パターンの意味

以上、4遺跡5例に共通する構造と行動＝下芝パターンを抽出した。行動は、構造の形成・土器の重ね合わせ・重ねられた土器の集積という流れをとり、2つの場において行われ、それを最終的に構造の形成された場に収斂させる行動として捉えられる。こうした行動の意味を考える上で、下芝天神遺跡における土器以外の出土品、石製模造品や白玉が、先の行動のどの段階で用いられたのかを考えてみよう。下芝天神ではこれらの遺物の出土位置をすべて知ることはできないのだが、石製模造品のうち、比較的形態の整ったもの、斧形や有孔円盤、剣形品などは土器の間や中からではなく、旧地表面に接して認められたものが多い。行動の段階とすると、集積行動以前、構造の形成とほぼ同時に用いられたものと見ることができよう。寺尾東館では、「最下層の土器のさらに下層から」白玉の出土を見ており、構造形成に先行する行動の結果であることが想定される。ともに、構造と石製模造品や白玉の存在が密接なものであることが示されると解したい。一方、土器の中にも白玉があった。この白玉の存在は、「別の場」における行動の結果であり、構造との関係は希薄であるだろう。石製模造品や白玉が、最終的には一つの場に収斂される少なくとも2つの行動の、それぞれ特定の段階において用いられていることがわかる。これは、土器のありようから抽出される行動と等しい。石製模造品や白玉は祭祀専用具である。下芝パターンは、特定の場において、特定の行動の段階で祭具を用いる行為の最終的な結果として形成された遺構なのである。

(洞口正史)

文 献

- 小林行雄 「祭祀遺跡」 水野清一・小林行雄編『図解考古学事典』 東京創元社 1959
高崎市教育委員会 『寺尾東館Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡』 1996
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 『深谷市城北遺跡 一般国道17号上武道路関係埋蔵文化財発掘調査報告書 Ⅱ』 1995
埼玉県埋蔵文化財調査事業団
松本市教育委員会 『松本市高宮遺跡 一緊急発掘調査報告書一』 1994
桜井秀雄 「石製模造品を用いる祭祀儀礼の復元私案」『長野県考古学会誌 79』 1996
清水 豊 「群馬町上井出遺跡出土の祭祀遺物」『群馬考古学手帳 Vol.3』 1992